7　日本軍の敗北

●首里城陥落●　牛島満軍司令官ら軍首脳はそれより先の五月二七日、すでに首里城跡の軍司令部を脱出していた。そして南風原村の津嘉山洞窟陣地にとどまったのち、自決現場となる摩文仁に向かった。難攻不落とされていた軍司令部が米軍により占領されたことによって、日本軍は敗北への道をいっきに突き進むことになったのである。その二日後の五月二九日、首里城跡に星条旗が掲げられた。

第三二軍の南部戦線への撤退が決定されてから、軍需品の後送や撤退用道路の整備など、いわゆる後方処理の作業が進められていたが、そのなかでとくに悲惨だったのが重傷患者の処遇問題であった。首里戦線撤退時、首里および津嘉山付近には約一万名にのぼる重傷患者が収容されていた。しかし、輸送力の不足と軍需品の後送を優先するという理由により、大部分の重傷患者が残されることになった。

しかも後方処理の名のもとに、軍参謀長の命令で手榴弾・薬品などが手渡され、自決が強要された。こうして軍隊の移動に支障をきたし、戦場に復帰できる見込みがないと判断された重傷患者は、つぎつぎに〝処分〟されていった。ここにも兵士の命が徹底して軽んじられた、日本軍の性格が端的に示され

ている。

第二四師団の残存部隊が米軍の包囲を受けて苦戦を強いられ、その包囲網から脱出するのは五月三一日のことであり、翌日米軍は首里を完全に占領した。一段と勢いを得た米軍の攻撃を前にして、日本軍は南部島尻地区へ撤退する途中、自然洞窟などに潜んで米軍を待ち受けたものの、圧倒的な火力と兵力を誇る米軍につぎつぎと踏み潰されていった。

首里戦線撤退後、津嘉山到着を待って歩兵第六四旅団長の指揮下に編入された独立歩兵第三二大隊は、津嘉山東方高地に陣地を構え米軍と相対することになった。一方、与那原方面に展開していた独立混成第四四旅団は、戦車を中心とする米軍の重火力の前に抵抗を断念し、三一日夜には陣地を放棄することになる。

この間、旅団砲兵隊・独立混成第一五連隊・海軍の丸山大隊などが、旅団主力の撤退を側面から援護する作戦をおこない、旅団主力はどうにか六月二日になって、南部方面への撤退をおこなうことができた。

そこにおいて、日本軍主力から取り残されたり、戦闘に巻き込まれた沖縄住民の悲劇がくりかえされることになっていくのである。

●小禄地区の攻防●

一時軍司令部が設置されていた津嘉山地区での戦闘は、六月二日に入って一段と激しくなり、米軍の浸透を防ぐことはますますむずかしくなってきた。とくに首里戦線の崩壊後、米軍は東海岸の与那原付近からも日本軍陣地に攻撃を加えつつあり、日本軍との戦力

の開きはいっそう大きなものとなっていた。翌三日になって津嘉山地区の日本軍は、米軍との戦闘を続けながらも、結局陣地を放棄して敗走しはじめていた。

六月四日、シェファード少将が指揮する米第六海兵師団は、西海岸に位置する海軍小禄飛行場の占領を目的として飛行場北部の海岸に上陸した。米軍は、那覇東南方の真玉橋方面から進攻した他の部隊と呼応して同飛行場に向け進撃し、包囲作戦を展開する。

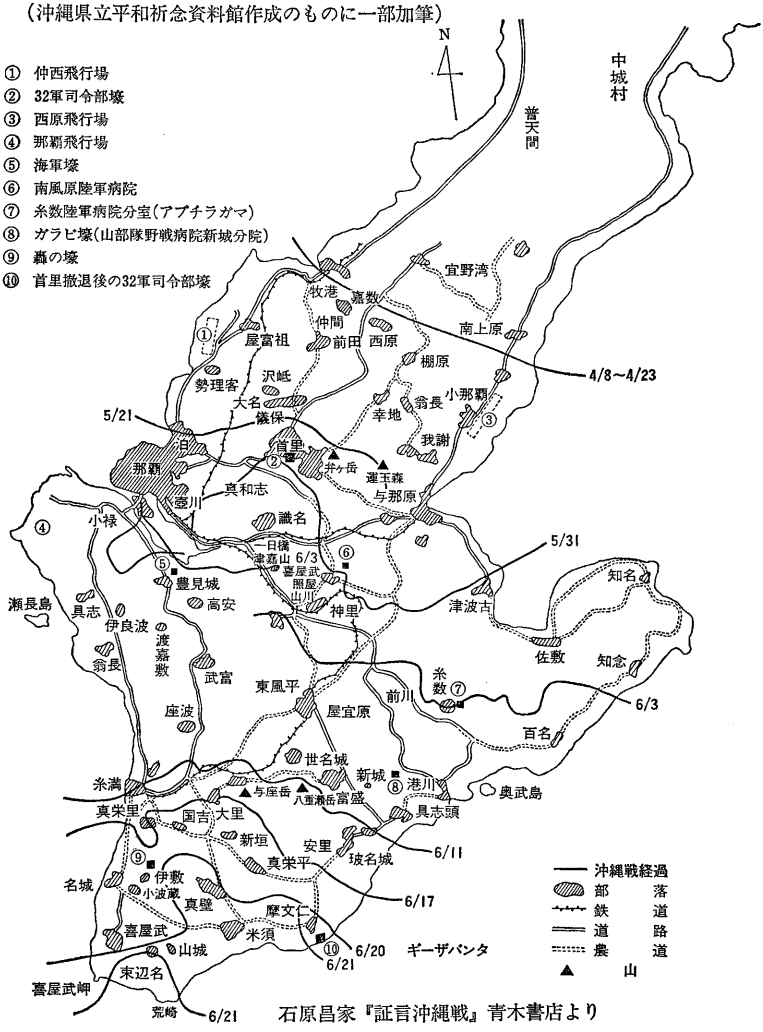
小禄飛行場は、沖縄における海軍の最重要基地の一つであり、日本海軍は沖縄作戦開始当初、この小禄地区に約一万名の陸戦隊（司令官大田実少将）を配置し、飛行場の守備にあたっていた。なかでも豊見城高台に設置された海軍司令部の地下壕は、地下約三〇メートル、幅約二メートル、高さ約二メートル、全長約二七五メートルの手掘りの壕としてその堅固さを誇っていた。

米軍による小禄地区への攻撃は、四日の夕刻から激しさを増し、そのため大田司令官は小禄地区西南方の赤嶺に後退して指揮をとった。堅固であったはずの地下壕も米軍の攻撃には耐えきれなかったのである。陸戦隊は、夜間の闇に乗じて斬り込みをおこなった。それは無駄死にであったが、火力・装備に劣る日本の軍隊は、これまでも見られたように斬り込みによってはじめて〝戦死の栄誉〟を与えられたのである。

予定されていた陸戦隊の南部島尻地区への撤退は、もはや不可能となった。六日夕刻、海軍次官宛に訣別の電報を発した大田司令官は、同日赤嶺から豊見城に移動して戦闘を続けたものの、戦闘状況の劣勢は挽回できず、豊見城西側の七四高地での戦闘の主導権も終始米軍の手にあった。七日になって、米

沖縄本島南部における戦闘経過と主な集落図

（沖縄県立平和祈念資料館作成のものに一部加筆）



石原昌家『証言沖縄戦』青木書店より

第一海兵師団と米第六海兵師団とが呼応した作戦によって、陸戦隊は第三二軍から完全に分断され、この結果孤立無援の絶望的な戦いを強いられることになった。

南部島尻地区への敗走を重ねていた日本軍は、その間ときには斬り込みなどの夜襲をおこなったものの、ほとんどの場合が洞窟に身を潜めて米軍の攻撃を避けていただけだった。

ところが、この兵士たちが入ろうとした洞窟には、すでに沖縄住民が戦禍を避けて身を潜めていた。その結果、日本軍兵士は、沖縄住民をそこから追いだしたり、泣く子どもを殺害するなど、自らの命を守ることだけに躍起になっていた。洞窟から追いだされた沖縄住民は、そのため砲火のなかをさ迷い歩かねばならなかった。そのことが住民の被害をいっそう甚大なものとした。戦後の厚生省統計に見る「壕提供」を原因とする一四歳未満の死者は、実に一万人に達している。

一一日になり、小禄地区の陸戦隊は壊滅寸前の状態に追い込まれ、大田司令官は同夜「玉砕」する旨の電報を発したのち、一三日に自決し、小禄地区は陥落した。

●南部島尻地区の戦況●

第三二軍司令部は、小禄地区の陥落以後、南部島尻地区に敗走してくる残存部隊の掌握と指揮組織の整備に努めていたが、その作業は実際にむずかしいものであった。軍司令部は残存兵力を約三万名とみていたが、いずれの部隊も指揮官の多数を失い、軍隊としての体裁を事実上喪失していた。

南部島尻地区へ敗走する日本軍残存部隊の追撃・掃討戦に入っていた米軍は、六月五日には与那原方面から早くも具志頭（ぐしがみ）に、さらに翌六日には八重瀬岳北方の世名城（よなぐすく）に進出していた。七日夕刻の時点で日

本軍の最前線は、具志頭・富盛・世名城・武富・小禄・松川・具志を結ぶ線と報告されていたが、戦線は各所で突破されていた。米軍はそこからいっきに戦線を拡大して、沖縄戦に終止符を打とうとしていたのである。

こうして米軍は一〇日以降、八重瀬岳陣地および高嶺村字与座部落西方陣地への攻撃を開始し、左翼正面の糸満・照屋・大城森、さらには同日夕刻より国吉・大里・与座・世名城などの日本軍陣地への攻勢を強化しつつあった。これら一連の戦闘で、米軍は艦砲・迫撃砲など多種多様な火力を用いて日本軍陣地に徹底した攻撃をおこなったのち、戦車や火焔戦車をともなった歩兵を前線に投入し、日本軍陣地を一つ一つ潰していくといった確実な戦法を採用していた。

戦局の行方がもはや明らかになっていた段階で、沖縄住民を巻き込んだ日本軍の勝利の見込みのない戦闘は、必要以上の死傷者を出すことになっただけでなく、沖縄住民の悲劇をより深刻なものとしていた。そこには、日本軍隊の名誉のために〝死〟を強要したり、また本来第一に守るべき住民の存在を忘れた天皇の軍隊のおぞましさだけが浮彫りにされていたのである。

投降勧告と戦闘の継続

日本軍守備隊の現状から、米第一〇軍司令官バックナー中将は、一一日の午後五時をもって、日本軍へのすべての攻撃を中断した。こうして牛島軍司令官に無条件降伏の勧告をおこなった。さらには日本軍との休戦交渉にあたるため、渉外班の一隊が糸満の高地で日本軍の代表を待った。だが、日本軍側からの応答はなく、結局戦闘は継続されることになった。

翌一二日には、航空機によって降伏を勧告するビラ約三万枚が日本軍陣地に散布された。「なつかしきふるさと」と題したビラには、「小川のながれ、みどりの島、平和な家庭／そこには老いたる父母といとしき妻あり／あゝなつかしきふるさと／気高き富士はあたかも諸君を手招きして居るようである」と記されていた。日本軍兵士に郷愁の念を起こさせ、平和な家庭人として日常生活への復帰の願望を巧みに説いた内容のものであった。しかし、ビラを拾って読むことは許されず、兵士個人の判断で投降に応じることもほとんど不可能であった。

一二日未明に米軍の攻撃が再開され、同日中に八重瀬岳地区陣地の一部に米軍が侵入した。一方、与座部落・玻名城（はなぐすく）地区に布陣する独立混成第四四旅団は、どうにか米軍の攻勢に耐えていたものの、一三日になり玻名城の特設第三連隊が全滅したのに続き、一四日には九一高地および玻名城付近に布陣した独立混成第一五連隊も全滅に近い損害を受けていた。このとき日本軍は右翼戦線で仲座南側台地・仲座部落・一二二高地・八重瀬岳一五六高地を結ぶ線を確保していたが、米軍は八重瀬岳を突破して左翼戦線と右翼戦線の分断を狙っていた。

一五日にかけて第二四師団正面（与座岳・大里付近）、さらに歩兵第三二連隊正面の最左翼（国吉・真栄里付近）でも、米軍の進攻が急であり、牛島軍司令官は戦況の立てなおしのため、第六二師団主力の与座・仲座方面への投入を決定し、右翼戦線の総崩れを何とか防ごうとした。しかし米軍は一六日、仲座南側から八重瀬岳南側を結ぶ線まで踏破してしまった。翌日には第四四旅団の主陣地が突破された結果、右翼戦線は完全に崩壊することになった。米軍はこれによって、日本軍司令部の置かれた摩文仁

方面への進路をほぼ確保することになった。

一八日になって日本軍司令部は八重瀬岳地区陣地を放棄し、与座岳陣地まで後退することにした。同時に第二四師団の守備する中央部は、新垣北側高地・真栄平北方高地・真栄里東方台地の正面に米軍の攻撃を受け、日本軍の崩壊のときが刻一刻と近づいていた。戦局が最終段階にきたことを認めた牛島軍司令官は、この日参謀次長および第一〇方面軍軍司令官宛につぎのような訣別の電報を発した。

最後の決闘に当たり既に散華せる麾下数万の英霊と共に皇室の弥栄と皇国の必勝とを衷心より祈念しつつ全員或は護国の鬼と化して敵の我が本土来寇を破摧し或は神風となりて天翔けり必勝戦には馳せ参するの所存なり

ここには、無駄死にを強いられた日本軍兵士や、長びく戦闘に巻き込まれて尊い生命や健康な肉体を奪われていった沖縄住民への配慮は全くなかった。ただ日本帝国軍人としての名誉だけを最後の最後まで優先させてきた、牛島司令官の人となりがいかんなく発揮されていたといえよう。

◎軍首脳の自決と沖縄住民の悲劇◎

六月一七日に糸満町真栄里の高地で日本軍の砲弾のため第一〇軍司令官バックナー中将が戦死した。後任のガイガー海兵少将が指揮をする米軍は、一九日になって第三二軍司令部の置かれた摩文仁の東方数百メートルの地点に急迫していた。このときまでに米軍は、新垣・真栄平・米須の地域まで接近しており、軍司令部はしだいに包囲網を狭められつつあった。

こうした状況のなかで、軍司令部は二一日に各司令部ごとの玉砕を決定した。翌二三日（二二日との

説もある）には、第六二師団長藤岡武雄中将と歩兵第六三旅団長中島徳太郎中将とが参謀長らとともに自決した。そして同日正午、摩文仁部落の守備隊が全滅したのち、軍司令部に直接攻撃が仕掛けられると、牛島軍司令官と長軍参謀長は、軍司令部内の坑道内で自決した。

ところが、牛島軍司令官は六月一九日、「各部隊は各地における生存者中の上級者之れを指揮し最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」との軍命令を出していた。この命令は一切の降伏を許さず死ぬまで戦えとの意味であった。このため、残存部隊のなかには海岸の洞窟などに潜伏してあくまで抵抗の姿勢をみせた者もあった。南部の島尻地区に日本軍とともに避難・集結していた一般住民に混入して米軍の目を逃れたり、あるいは包囲網をぬって国頭地区への脱出を試みる者も少なくなかった。この命令に従って戦闘が続けられた結果、住民の被害をいっそう大きくすることになった。

こうしたなかで、とくに六月以降における南部戦線での戦闘に巻き込まれた沖縄住民の被害は甚大であった。沖縄住民は一連の戦闘で、日本軍と米軍との板挟みに会って敵前に放置されたり、また戦闘の支障になるとの理由で日本軍により自決を強要され、さらには殺害されるという運命をたどることになったのである。次ページの別表のように沖縄戦における日本軍の戦死者約九万四〇〇〇名にたいし、住民の死者も約九万四〇〇〇名に達していた。その多くが南部戦線での死者である。たとえば、中部の浦添村民の死者の約五四・三パーセントが、日本軍の南部撤退後に生じている（『浦添市史　第五巻』）。また南部の米須では、それは八七・八パーセントとなっている（石原昌家『大学生の沖縄戦記録』）。なお、最近の研究では、沖縄県出身の軍人・軍属の戦死者を含めて、沖縄県民の戦没者は約一五万人と考えられて

いることを付言しておきたい。

ここに、沖縄住民を巻き込んだ国内戦としての沖縄戦の特徴が具体的に示されている。戦後、こうした沖縄住民の悲劇が明らかにされるにつれ、沖縄における日本軍の実態と、日本の軍隊がけっして自国民を守ることを目的としたものでないという日本軍自体の本質とが暴露されていくことになったのである。

米軍は二三日以後、日本軍残存部隊の掃討戦に入り、七月二日に沖縄戦の終了宣言をおこなった。日本軍残存部隊は、八月一五日の日本の無条件降伏受諾後も沖縄各地に潜伏していたが、八月二九日に歩兵第三二連隊の約三〇〇名が、さらに九月四日に同連隊の第二大隊の約二〇〇名が米軍に投降した。沖縄の日本軍の降伏調印がおこなわれたのは、それから三日後の九月七日のことであった。

沖縄戦における戦没者数

県外出身日本兵	6万5908人
沖縄県出身軍人・軍属	2万8228人
一般住民	約9万4000人
日本側戦没者総数	18万8136人
(うち沖縄県民)	(12万2228人)
米軍	1万2520人
沖縄戦の戦没者総数	20万0656人

(沖縄県援護課資料より)

〔説明〕
- 男子学徒隊は軍人に，女子学徒隊は軍属に含まれている。
- 一般住民の戦没者数は，沖縄戦前後の人口統計などからの推定数にすぎない。日本政府や琉球政府—沖縄県はまとまった調査を一度もおこなっていない。
- マラリヤ病死や餓死なども含めると沖縄県民の犠牲者の総数は，15万人前後にのぼると推定されている。
- 数千人あるいは1万人を越えるかもしれない朝鮮人の戦没者は，この公式の戦没者数には，ひとりたりとも含まれていない（本書13参照）。